

私は、「十二歳、僕の夏」を私の十二歳の夏に読んでみました。主人公は、十二歳の男の子の純です。この物語は純の友達関係、りこんしている両親たちへの気持ちの変化、引っこしてきたおじさんの北山さんとの繋がりが描かれています。

純は中学生になってから、友人関係でなやんでいました。小学生の頃からの友達、高志と純の間に、中学で新しく知り合った山崎が入ってきました。山崎が新しく加わった事によって、純はさびしかったり、ふゆかいに感じるが増えました。私も、現地校で中学生になって、友達関係が変わったので、純の気持ちがよくわかります。その時に、私を感じたもやもやする気持ちは、純が感じていた気持ちと同じものだったのかもしれない。

純の家庭の事情と私の家庭は少し違うので、両親がりこんしている純の気持ちは想像するしかありません。例えば、両親がりこんして間もない頃に、純が家出をして、お父さんに会いに行った場面がありました。お父さんがすでに新しい家族と一緒にいるところを目撃して、子供ながらにショックを受けました。もし、私も同じような状況だったら、幼すぎて、何が起こっているのか理解できなかったかもしれません。

幼い頃の純は、ショックでお父さんに話しかけられませんでしたでしたが、十二歳の夏、お父さんに会って、話をしに行きます。でも、思ったよりもあっけなく終わっていききました。それでも、お父さん自身から真実を聞いて、現実をちゃんと受け止めたかったので、お父さんと話をしてすっきりしました。もし、私の両親がりこんしていて、

お父さんが知らない間に別の家族を持っていたら、私ならどうするだろうと想像してみました。私だったらもつと大人になってから会いに行くかもしれないですが、十二歳の段階では、会いに行く勇気がないと思います。そう思うと、会いに行った純はしっかりと考えを持っているなど感じました。

他に、純に起こる出来事として、あるおじさんが純の村へ引っこしてくるということが起こります。純はその北山さんとすぐに仲良くなり、勉強まで教えてもらうほどになります。北山さんも、奥さんとりこんしていたので、純は自分のお父さんの話を打ち明けました。だけど、お母さんから北山さんとの再婚を考えていると聞かされたとき、純はすぐに受け入れられませんでした。私が思うには、純は北山さんを信頼していて、好きだけでも、お父さんみたいな存在ではなかったのだと思います。それから、純がお母さんの再婚について考えるうちに、自分がいつも、自分を中心に物事をみていたということに気づきます。その場面を読んだとき、私は、純がとても大人びた十二歳だなと感じました。私はいままで、そんなに深く考えた経験がなかったの、本当に同じ十二歳なのか少し疑いたくなりました。

純は自分の成長をセミが殻をぬぐことに例えていました。友達関係でなやんだり、自分のことをもつとよく知ったり、物事を受け入れたら、中にはすぐに受け入れられないこともあるけれども、それでもその事について深く考えることが十二歳の私達が殻をぬいで成長するという事なのではないでしょうか。この本は、そんなことを考えさせてくれました。